

(竹與し心俱空) 2043 ためずとも直きこころはおのづから竹とともに

やむなしかるらん

(白眼看三他世上人)

2049 世の中の人をさくればおのづから塵なき庭の松の下臥(し)

(調與三時人二背心将三静者論)

2051 我をしる人しなれば我しらぬ人に見すべきこと草もなし

(溪舟因天地一釣竿の心を)

2053 海ばらにたゞ一筋の釣の糸の外にうつさじおのがこころを

1967・2034・2043 番の歌には、彼のひねたようなものの見方が、2051・2053 番の歌には容易に心を開かぬ秋成の態度が見受けられるのである。このように暗い歌を詠んでいる秋成だが、私はここにおいて、秋成の

「……歌とは心の中よりいづる者也」という作歌態度、つまり、飾

「球磨・人吉地方の人称代名詞」

荒 嶽 久 美

目 次

- 序
- 一、研究の動機と目的
- 二、調査地域
- 三、環境と歴史・人事

らずに、偽らずに歌を詠むという彼の作歌に対する信念を、はっきりとみたような気がするのである。

以上、秋成の歌の特異性について述べてきたが、秋成の歌は、万葉風・古今風・新古今風・を示していて、かなり多彩であるが、しかし、彼の歌としてその特異性を示すものは、古歌にとられた作ではなく、古歌に学んだ教養を充分生かして詠まれた歌なのである。そして、その詠まれた歌とは、彼の自由でのびのびとした性格から作られた歌であると共に、彼の暗い性格から作られた陰鬱な歌であることも見逃がしてはならないと思うのである。

以上、第三章、第四章について述べたが、第一章、第二章については、提出の卒論を参照願いたい。

四、調査

本 論

第一章 第一人称の人称代名詞

- 一、オイ
- 二、ワシ
- 三、ワタシ

四、ボク

五、その他

第二章 第二人称の人称代名詞

一、オマイ

二、オマイサン

三、オマハン

四、ヌシ

五、ワイ

六、コナタ

七、アンタ

八、アタ

第三章 第三人称の人称代名詞

一、コンシト

二、コンマイ

三、コイ

四、コヤツ

五、ダイ

序

一、研究の動機と目的

球磨・人吉地方は、熊本県内にあっても、他の地域と違った独自の方言を有していると思われる。そのため、この地方に生れ育った筆者は、以前から方言に対して関心を持っていた。

球磨郡で「コンシト」（この人）ということばが、人吉市では「コンマイ」である。この二語の相違に興味をもち、人称代名詞について調べてみようと思いついた。

ここでは、球磨・人吉地方で使用されている人称代名詞の実態を把握することが目的である。

二、調査地域

調査の中心は、水上村においた。水上村は、筆者の生れ育った村であるため、つつ込んだ調査に適していると考えたからである。

また、広範囲の状況を知るために、水上村のほかに、九カ市町村を対象とする調査も行なった。これらはみな、球磨川に沿った、盆地にある市町村である。東から順に市町村名をあげる。湯前町、多良木町、岡原村、須恵村、深田村、免田町、上村、錦町、人吉市。

三、環境と歴史・人事

球磨・人吉地方は、熊本県の南東部に位置している。東と南が宮崎県、西南が鹿児島県に境を接している。また、北は八代郡市、西は芦北郡と水俣市である。

郡の中心を日本三雲流の一、球磨川が貫流し、これを中心に、大きな盆地を形成している。また、周囲には、九州脊梁山脈と呼ばれる高く険しい山々がそびえている。

歴史的には、かなり古いといわれている。鎌倉時代から、江戸時代までは、相良氏がこの地域の領主であった。明治以後になって、熊本県に編入されたのである。

文化程度は、農村部（人吉市を含む）は比較的高いようである。

が、山村部はかなり低いようである。

調査の中心とした水上村は、球磨郡の一番東にあり、球磨川の一番上流である。東側は宮崎県、西は五木村と多良木町、北は八代郡、南は湯前町に接している。村の中央部には、市房ダムがあり、南東端には県下一の高峰市房山がそびえている。

水上村は江代、湯山、岩野の三大字に分れている。三大字は、それぞれに特色を持っているが、ここでは、おもに湯山が中心となる。(田代政嗣原著・堂屋敷竹次郎訳註「新訳求麻外史」・高田素次編「水上村史」・水上村役場発行「西覧みずかみ」・同「広報みずかみ」参照)

四、調査

調査対象は、水上村においては、筆者の身近な者が中心である。また、水上村外においては、対象はおもに老人層である。

調査方法としては、視察法と、口頭による質問法を併用した。

本 論

第一章 第一人称の代名詞

一、オイ

「オイ」は、第一人称の代名詞の中心をなす語である。たぶん、「オレ」から変化したものであろう。「オレ」は、鎌倉時代から用いられ始め、南北朝時代頃から盛んに用いられるようになったものといわれている。(土井忠生、森田武「国語史要説」一〇五頁参照)

水上村では、おもに同輩や目下の者に対する時に用いるが、目上の者でも、相手が親しい人の場合には用いている。

もとは、年令や性別を問わず、誰でも使用する語であったようである。現在は、男子の場合、小学生に全く使用しない者がまれにみられる程度で、まだ全般的に使用している。もともと、小学生には、「オイ」は悪いことばであるという意識がかなり強いようで、そのためか、使用する回数、中学生以上の者に比べて、かなり減少するようである。いっぽう、女子の場合は、使用者は、青年層から年令が下がるにつれて減少している。そして小学生になると、全く使用しない者が半数に達するようである。女子の学校ことばとしては、「オイ」はほとんど使用されず、中学生のごく親しい者の間で使用される場合がまれにあるだけである。

人吉市と球磨郡(以後これを一括して郡市と称する)全体から、「オイ」の使用状況をみると、商店街や住宅地など(商店街も住宅地も、郡市の中心的な、人吉市、免田町、多良木町などの商店街や住宅地をさす。以後も同様に使用する。)では、女子は、わずかに老人層が用いるだけであり、男子は、中学生以上の者が用いているようである。その他の農村部では、それよりも多く用いられている。水上村は、農村部の中でも多く用いている方であると思われる。

中 略

ところで、「オイ」の複数形である「オドン」は、単数としても使用されている。これは、おもに女子が使用している。単数の場合に複数形を用いると、さし示す対象が漠然となるので敬意が高くなる。これは、その一例であると思われる。そのために、女子が好んで用いるのであろう。

使用する相手は、同輩が中心となって、少し目上から目下までである。使用地域は、郡市全体であるが、特に人吉市内では多く用いているようである。人吉市は、城下町であったためか、よそよりも丁寧なことばを使用することが多いようである。また、現在でも商店などが多く、ことばは丁寧である。だから、丁寧な「オドン」をより多く使用するのであろう。

後略

二、ワシ

「ワシ」は「ワタシ」から転じたものといわれ、江戸時代から使われていたようである。（「国語史要説」一六二頁参照）

これは、目上の者に対して用いる語である。男子は三十才前期から用いているようであるが、女子は、早い者でも四十才を越さないといえないようである。地域的には、郡市全域で用いられるが、人吉市内では、女子の使用量は少ないようである。

後略

三、ワタン

現在、「ワタン」という語は、女子を中心に、次第に多く用いられるようになってきている。

水上村の場合、一番多く用いるのは小学生であって、筆者の小学校時代には、学校ことばとしてしか使用しなかったものが、現在は、女子の半数は家庭でも「ワタン」を使用していると思われる。

中学生、高校生になると、家庭での使用は、やや減少するようである。青年層ではもっと減少し、家庭で「ワタン」を使用する者は少

なくなる。しかし、親しくない人との接触においては、ほとんど「ワタン」を用いる。女子でも壮年以上は、よほどあらたまった場合でないといえないようである。男子は、ほとんど使用する者はいないが、まれに、インテリぶったり、演説的に話をする者が使用する場合がある。

郡市全域の使用状況をみると、商店街・住宅地などでは、老人層を除くほとんどの女子が使用している。老人層もあらたまって話をする場合などには用いているようである。農村部にしても、かなり多く使用するようになっており、その中では、水上村は使用が少ない方であると思われる。

後略

四、ボク

「ボク」は「ワタン」に対応する男性語として、次第に多く用いられるようになってきた。しかし、「ワタン」に比べると、使用数はまだずっと少ないようである。

水上村では、小学生でも「ボク」だけを使用している者はまれである。また、一応学校ことばとしての役割は果しているが、やはり「ワタン」ほど完璧なものではない。そして中学生以上になると、ほとんど使用しない。

郡市全体から見ると、商店街や住宅地では、小学生はほとんど使用するようである。しかし、中学生、高校生になるとあまり使用しないようである。また、農村部は、あまり使用しておらず、水上村が平均的といえるであろう。

後略

五、その他

略

第二章 第二人称の人称代名詞

略

第三章 第三人称の人称代名詞

一、コンント

「コンント」は、「コノヒト」から転じたものと思われる。「コノヒト」は室町時代に使用され始めたものといわれている。（「国語史要説」一〇六頁参照）

この語は、第三人称の中では最も一般的なもので、誰でも気軽に使用している。使用対象も広いが、直接相手をさし示すことばであるから、敬意が下がるので目上の人には使用されない。地域的には、郡市一円どこも同じように使用されているようである。

後略

二、コンマイ

これは、序でも述べたように、人吉市だけで使用されることばである。このことばを使用するかどうかで、生粋の人吉っ子であるかどうかが見分けられると言っても過言ではないであろう。人吉市といても、現在は範囲が広がっているので、旧城下一帯といった方が適切かもしれない。

このことばは、純粋な商人ことばとして発達したらしく、商人仲間どうしで使用することが多かったのではないだろうか。現在も、使用対象は同輩が中心で、目下にも用いる。

「コンマイ」の発生については、明らかにする資料もないが、「コノヒト」などが生じた室町時代あたりに、同様に「コノ」+「マイの原形」という形で発生したのではないだろうか。また、この類語として、「コンマレ」が天草で、「コノマイ」が大分で使用されている記録がある。（田上正行「熊本県方言資料篇」・「分県方言辞典」）

後略

三、コイ

「コイ」は、「コレ」から転じたものと思われる。「コレ」は平安時代に指示代名詞として使用されており、その頃から人称代名詞としても使用されていたと思われる。（「国語史要説」五五頁参照）水上村では、「コイ」は専ら目下に対して用いるが、男子の場合には、同輩の親しい者に対しては用いている。また、男子はどの年齢でも使用しているが、女子は青年層からわずかに減少し始め、小学生になるとかなり減少している。しかし、まだ使用しなくなるということはない。

これを郡市全域から見ると、商店街や住宅地では、女子はほとんど使用せず、男子が、水上村の女子程度の使用状況であると考えられる。農村部は、水上村が大體平均的ではないだろうか。

後略

四、コヤツ

鎌倉時代に使用された「コヤツ」から来たのではないかと思われることばである。（「国語史要説」一〇六頁参照）しかし、鎌倉時代には、まだ「ソヤツ」や「アヤツ」、「ドヤツ」は発生しておらず、その点疑問がないわけではない。

「コヤツ」は、「コイ」よりも一段下の卑称であって、今は中年以上の者しか使用しないようである。女子の場合は、おもに叱責などの語気を荒くする場合に使用する。いっぽう、男子はその他の場合でも使用するが、やはり相手を快く思っていない場合が多いようである。

後略

五、ダイ

これは、他の語と異なり、不定称以外に類似の形をもたないものである。室町時代に発生したといわれる「ダレ」から転じたものであろう。（「国語史要説」一〇六・一〇七頁参照）

「ダイ」は、誰でも使用する語であるが、近年商店街や住宅地を中心に、女子の中に「ダレ」を使用する傾向も出てきている。

後略

結び

以上、球磨・人吉地方における人称代名詞の実態について述べてきたわけであるが、この中で注目される点をいくつかあげてみよう。

まず、中心的に使用されている語は、第一人称「オイ」、第二人称「オマイ」、第三人称は「ソシ」など、第二人称は「オマイ」、第三人称は、「コンシト」、「コイ」などである。これらの人称代名詞の中には、「ラ」行音や「エ」音が「イ」音に変化したものがかなり多いようである。また、これらの人称代名詞は、室町時代頃に発生したものが多くようである。

人称代名詞の各語の分布状況をみると、人吉市にわずかな相違がみられる程度で、球磨郡全体としては、ほとんど差異はみられなかった。しかし、市街化された地域から、徐々に共通語化が進んでいくことも事実である。

年齢差による分布状況は、顕著なようである。どのことばも、中年、壮年層あたりを境として、古いことばを使用する者と新しいことばを使用する者に分かれていくようである。

つぎに男女間の相違をみてみよう。男女間においては、以前はそれほど明瞭な区別がなかったのに、近年は、特に第一人称などでは明瞭に区別されるようになりつつあるようである。このような方言の実態は、現在急速に変化しつつある。古いことばはつぎつぎと姿を消し、新しく、共通語が進出してきている。特にマスコミの発達した今日では、その変化の速度は、めざましいものである。われわれは、このような現実を冷静に把握し、より広い立場で日本語の将来のために努力しなくてはならないであろう。